

2025 秋 システム監査技術者 午後 I 全国統一公開模試 講評と採点基準

2025 年 9 月 25 日 (株)アイテック IT 人材教育研究部

■ 全体講評

午後 I 試験の問題ごとの平均点は、問 1 (100 点満点) で 20.0 点、問 2 (100 点満点) で 13.1 点、問 3 (100 点満点) で 13.8 点となりました。全体の平均点は 30.4 点という厳しい結果でした。本試験合格のためには、午後 I・午後 II とともに 60 点以上を確保する実力が必要です。今回の模試では、午後 I で 60 点以上を獲得した受験者はわずか 3 名 (全体の 6.1%) という非常に厳しい結果となりました。これは昨年公開模試と比較しても著しく低い水準であり、問題の難易度設定が高すぎた可能性も考えられますが、一方で解答表現の対応力不足という受験者側の課題も浮き彫りになりました。

選択傾向を見ると、問 1 が 27 名 (全受験者の 55.1%)、問 2 が 41 名 (83.7%)、問 3 が 30 名 (61.2%) という分布でした。意外にも、新技術である生成 AI を扱った問 2 の選択者が最も多かったことは、受験者の関心の高さを示していますが、平均点 13.1 点という結果は、理解の深さが伴っていないことを示唆しています。

採点を通じて最も懸念されたのは、解答の表現力の問題です。多くの受験者が問題の本質は理解しているものの、設問が求める形式で解答できていませんでした。特に顕著だったのは、「理由」を問われているのに「状況」を説明する、「なぜ」に対して「何が」で答える、といった設問要求とのミスマッチです。監査報告書では論理的な説明が不可欠であり、この表現力の欠如は致命的です。

60 点以上を獲得できなかった理由の多くは、知識不足ではなく表現力の問題でした。例えば、「システム基盤が ERP に変更となる」という事実は認識できていても、「なぜそれが問題なのか」を論理的に説明できない答案が大半を占めました。本試験では、単に知識をもっているだけでなく、それを適切に表現する能力が問われます。

< 午後 I >

問 1 プロジェクト管理の監査

【採点基準】

[設問 1]

解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して 10 点。

[設問 2]

a : 解答例のとおりで 2 点。

b : 解答例のとおりで 3 点。

判断した理由：該当箇所が正しく指摘されていれば 5 点。

[設問 3]

解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して 10 点。

[設問 4]

解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して 10 点。

[設問 5]

解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して 10 点。

【講評】

ERP パッケージ導入に関する本問では、平均点 20.0 点という結果でした。しかし採点していて感じたのは、多くの受験者が問題の核心は理解しているにもかかわらず、適切に表現できていないということです。「何が起きているか」は分かっているのに、「なぜそれが問題なのか」を説明できない答案が大半でした。

[設問 1]

部分点を含めると約 60% の受験者が何らかの問題を認識していましたが、完全な得点は約 15% にとどまりました。典型的な不完全解答は「ERP に変更となったが、前回の生産性データを使用している」という状況説明で終わっているものでした。これでは「だから何が問題なのか」が示されていません。正解は「システム基盤が異なるため、前回の生産性データは適用できない」という因果関係を背景に解答する必要があります。

監査指摘では、単なる事実の羅列ではなく、「なぜそれが規程違反なのか」、「どのようなリスクがあるのか」を論理的に説明することが求められます。この基本的な表現技術の習得が急務です。

採点していて感じたのは、問題文の細部まで注意深く読んでいる受験者とそうでない受験者の差が明確に表れたということです。監査人として、細部に宿る重要な情報を見逃さない姿勢を身につけてください。

[設問 2]

プロジェクト難易度判定では、空欄補充は約 70% が正解しました。また理由の記述でもよくできていました。

一部の解答には「委託先が 2 社、パッケージを使用」という事実の列挙だけのものもありました。これは「判断した理由」になっていません。求められているのは「なぜ B ランクと判定されるのか」という論理的説明

です。「チェック項目の2点（委託先複数、パッケージ活用）が該当するため、規程によってBランクと判定される」という因果関係を示す必要がありました。

「理由を述べよ」という設問に対して、状況や事実を並べるだけでは得点になりません。「～だから」、「～のため」という接続詞を意識的に使い、論理の流れを明確にする習慣をつけてください。

【設問3】

組織ガバナンスの理解はあるものの、やはり表現で失点する答案が目立ちました。

「B氏は上級プロジェクトマネージャではない」という事実認識はできていても、「なぜ確認が必要なのか」を説明できていない答案が約半数ありました。「Bランクプロジェクトには上級PMが必要だが、B氏は該当しないため、規程によって補完策の確認が必要」という論理展開が求められました。

【設問4】

技術的専門性に関する設問でしたが、ここでも表現の問題が顕著でした。

「システムアーキテクトの経験が不適切」や「単にシステムアーキテクトがいない」という漠然とした解答が多数を占めました。指摘した内奥を解答するので、「いない」では指摘になりません。どういう人がどういう状態で存在しなくてはならないかを正確に理解した上で、何が足りないのかを指摘しましょう。

【設問5】

契約リスクの理解はあるものの、論理的説明ができていない答案が大半でした。

「リスク対応策がない」という事実は書けていても、「なぜそれが問題か」を説明できた答案は約20%でした。「FIT&GAP分析後も外部設計でアドオン量が増える可能性があるため、リスク対応策なしでは予算超過の危険がある」、「契約形態は請負である」という論理展開が必要でした。

監査報告では「規程違反です」だけでは不十分です。「なぜ規程があるのか」、「違反するとどうなるのか」、各々の契約の形態と形態ごとの受注先の責任範囲」まで考慮して初めて、経営層を説得できる監査指摘となります。

問2 生成AIシステム導入のシステム監査

【採点基準】

【設問1】

解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して9点。

【設問2】

解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して9点。

【設問3】

解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して8点。

【設問4】

解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して8点。

【設問5】

理由、作業内容 解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対してそれぞれ8点。

【講評】

生成AIという注目度の高いテーマで、選択者も41名と最多でしたが、平均点13.1点という厳しい結果でした。ただし、内容理解の不足というより、設問要求に対する適切な表現ができていないことが主な減点要因でした。

【設問1】

経営戦略を正確に把握する問題でした、文脈を正確に読み取れなかった答案が多くありました。

経営戦略を達成できないリスクとありますので、何が経営戦略なのかを把握する必要があります。新規ビジネスを指摘した解答が非常に少なかったです。

【設問2】

典型的な「状況説明で終わる」パターンが多数見られました。

「研修時間が10分で短い」という事実は書けていても、「だから何が問題か」を説明できた答案は約10%でした。「30分の目安に対して10分では、内容を十分理解できない可能性があるため、ヒアリングによる理解度確認が必要」という論理的な説明が求められていました。

「理由を述べよ」に対して「～という状況である」で終わる答案が非常に多く、因果関係を説明する訓練が不足していることが明らかです。

【設問3】

パッケージ選定の落とし穴を理解しているかが試されました。

正答率は約30%でした。既製品導入のメリット（コスト・期間）に目を奪われ、デメリット（業務適合性）を見落とす傾向は、実際のプロジェクトでもよく見られます。「安い・早い」だけで判断することの危険性を、

監査人として指摘できる眼を養ってください。「業務要件」というキーワードが入っていない解答が多かったです。

一部の答案では、セキュリティやプライバシーの観点から論じており、着眼点は良いものの、設問の要求からは外れていました。

【設問4】

経営戦略との整合性という高次の視点を要求しました。

正答率は約 30%と低く、デジタル人材育成という経営課題と、プロジェクト体制を結びつけて考えられる受験者が少なかったことが分かりました。単なる「体制の確認」ではなく、「経営戦略実現のための体制」という視点をもつことが、上位の監査人には求められます。また、誰がどうなっていることが重要なかが指摘すべきであり、単に「～な体制になっていること」といった抽象的な解答も多くありました。

【設問5】

組織横断的なリスク管理の重要性が問われました。

理由は約 40%が正解しましたが、作業内容まで適切に記述できたのは約 30%でした。「情報セキュリティが大切」という一般論ではなく、「情報漏えいリスクへの対応」という具体的な目的を示せるかで差がつけました。改善提案の作業内容では、「セキュリティ強化」のような曖昧な記述が多く、「リスクと対応策の妥当性再確認」という監査らしい視点での解答は少数でした。監査人は問題を見つけるだけでなく、適切な是正措置を提案する能力も必要です。

問3 運用・保守業務の監査

【採点基準】

【設問1】

解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して 10 点。

【設問2】

(1) 解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して 10 点。

(2) 解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して 10 点。

【設問3】

解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して 10 点。

【設問4】

解答例と同様の趣旨が適切に記述されているものに対して 10 点。

【講評】

外部委託管理という、多くの組織で共通する課題を扱いました。基本的なコントロールの理解を問う問題でしたが、意外にも正答率にばらつきが見られ、実務経験の有無や事前知識の差が如実に表れた問題となりました。

【設問1】

相互牽制の基本を問う素直な設問で、正答率は約 85%でした。

「照合」というキーワードを含む答案がほとんどでしたが、何と何を照合するのかが不明確な答案も散見されました。監査調書では、このような具体性が重要になります。実務を意識した正確な記述を心がけてください。

【設問2】

委託先管理の盲点を突く良問でした。

(1)の正答率は約 20%でした。「依頼外作業」のリスクに気づけた受験者は、実務的なセンスをもっていると言えるでしょう。ただし、「不正操作」、「悪意のある作業」など、過度に悪質な行為を想定した答案もあり、もう少し現実的なリスクを考える必要があります。また、この設問での論点は「発見できないリスク」です。「記載のない作業を行うリスク」ではないことに注意しましょう。

(2)の正答率は約 20%で、ログによる事後確認の重要性を理解している受験者が多数でした。ただし、「誰が」、「何を」確認するのかを明確にできていない答案が多くあり、責任の所在を明確にする意識が不足していました。「単に確認する」ではどういう観点で確認するのか分からないことになります。

【設問3】

形式的な確認と実質的な確認の違いを理解しているかが問われました。

正答率は約 20%でした。押印の確認だけでは不十分という認識はあるものの、では何をすべきかを具体的に示せない答案が多く見られました。「ログを見る」という解答は多かったものの、「作業依頼書の内容と照合する」という目的まで記述できた答案は限られていました。監査の基本は照合することであり、単に一つのものを見ることだけでは監査になりづらいてんを把握しておきましょう。

監査エビデンスとして何が有効かを判断する力は、監査人の基本的資質です。形式ではなく実質を見る習

慣を身につけてください。

〔設問4〕

システム管理基準の理解度を直接的に問いました。正答率約 30%と予想を下回りました。「根本原因の究明」という重要な要素を見落とした答案が多く、表面的な対処で終わってしまう傾向が見られました。「エスカレーション」、「報告書作成」、「顧客連絡」など、確かに重要ではあるものの、本質的ではない要素を挙げた答案が目立ちました。

障害対応において、再発防止は最重要課題です。そのためには根本原因の究明が不可欠であることを、改めて認識してください。

以上

itec